

松浦佐用媛石魂録

後集卷之上

13
3240
10上



13
3240
10

昭和十一年七月九日

小本

伊

興

崎

然れは彼市を^{きり}見且^ま其^{その}預^よけ^を某^た再^{また}三^{さん}意^い見^{けん}を^を加^かえ^を説^と論^とい^はる^る義^ぎ伏^{ふく}某^た者^{しや}

は^はた^たく^くも^も御^ご意^いを^を後^{のち}に^に度^{たび}の^の許^{ゆる}ま^まら^らば^ば加^か二^に郎^{らう}が^が願^{ねが}ひ^ひの^のま^まを^を彼^{かの}名^なを^を銚^{しやう}

と^と言^いふ^ふ蓋^かを^を理^り義^ぎ達^{たつ}辨^{べん}小^{せう}經^{けい}高^{かう}中^{ちゆう}に^に怒^{いか}り^りを^を鎮^{しん}め^めて^て令^{しやう}ふ^ふ瀬^せ川^{がわ}吉^{きち}次^じ主^{しゆ}

後^{のち}秋^{あき}布^ふ若^わ三^{さん}郎^{らう}を^を枕^{まくら}と^と爲^なす^す權^{けん}を^を汝^に預^よん^ん利^り室^{しつ}と^と説^とて^て後^{のち}に^に報^{ほう}

る^るふ^ふ及^{およ}び^び此^{この}刀^{かたな}の^の利^り鈍^{どん}を^を銚^{しやう}と^と期^きを^を推^おし^しと^と不^ふ老^{らう}不^ふ死^しの^の名^なを^を終^{しゆう}合^{ごう}で^で纏^{ちん}

と^とふ^ふけ^けは^は歌^{うた}二^に郎^{らう}の^の受^う戴^{たい}と^と君^{きみ}の^の大^{だい}量^{りやう}巨^こ海^{かい}の^の名^なを^をよ^よく^く容^{ゆる}め^める^るの^のま^まに^にか^かる^る

恩^{おん}命^{めい}あ^あら^らむ^む幸^{さい}ひ^ひの^のま^まに^に經^{けい}高^{かう}領^{りやう}を^を義^ぎの^の任^{にん}に^に任^{にん}じ^じに^にし^しり^り又^{また}席^{せき}を^を

易^{やす}く^くの^の隨^{ずい}を^を盡^{じん}す^す伊^い加^か太^た轉^{てん}馬^ま加^か二^に郎^{らう}亦^{また}も^もあ^ある^る又^{また}鷹^{たか}揚^{やう}身^みを^を

起^{おこ}す^す除^{すく}々^々と^と後^{のち}堂^{どう}を^を退^{たい}く^く要^{よう}時^じ目^め送^{そう}る^る歌^{うた}二^に郎^{らう}の^の雜^ざ兵^{へい}中^{ちゆう}に^に下^げ知^ちを^を傳^{でん}へ^へ吉^{きち}次^じを^を傳^{でん}へ^へ

さ^さを^を衰^しへ^へ若^わ三^{さん}郎^{らう}を^を捕^とら^らせ^せ秋^{あき}布^ふと^と枕^{まくら}と^と追^おひ^ひ追^おひ^ひ散^{さん}動^{どう}を^を庭^{てい}に^にお^おし^して^て向^{むか}ひ^ひ

向^{むか}ひ^ひの^の頼^{たの}人^{にん}の^の索^{さく}合^{ごう}を^を雜^ざ兵^{へい}の^の渠^かが^が左^さ右^うの^のま^まに^に各^{かく}々^々肩^{かた}を^を引^ひ被^ひて^て相^あ互^ごに^に踏^ふみ^み續^つけ^けは^は

石鬼録後集卷之二

十六

十八日

第廿三回

賢學凱旋と大團圓

陰へ濁り明るるを悟り且妬むと禽獸虫魚の皆相同し女子ぬく嫉妬るは七六の
 一去を免るといふも和漢今昔ありと稀る中其甚しあり又甚しかり其下死を
 妬婦といふも亦その一人あり根塚若三郎と女兒系袂是なり迷ひの雲身を蒸されし愛
 惜の執念利鎌ふく縛の索の断離と死手ふ把る鎌を腰に挿し古次夫婦を追蒐つて
 外面投ぐ出ればも聊時の後とす既ぬるその往方と志む心ゆく焦燥は是首狄彼首
 欲と索る程ぬ必し旗津の港口に來ぬけりといふは二艘の平駄舟繫留す水際あり
 當下系袂の舟人を呼ぶと喃その船ぬの向ん廿ぬまりある美男子と十八九なる女子の
 あり來つるといふはと向ん箇の舟人が身を起り欠伸と來ぬるとも問る如き
 こつた男女の嚮み快船ぬち來る松浦のへ走りこるといふ系袂還立とてそを件
 人々を追ひつとまぬるのめいさるの足るるも船賃を數かま來り追著更

かと憑り舟人微笑く原來を身の清媛扶て目言向ぬ世渡りれば推辞や
 疾棄之と心をゆ竿より詰り推寄する船ぬ内とち來る又推出し船綱を
 張る其処ともこらぬ澳のへ漕ぐと我里あるとあむこの夜月明し海上静るけれが
 船の疾と大なるねと脱と一人ぬと追はせしや曉さるる隨小系袂心氣疲まそ
 寝るとる目睡え敬馬覺る四下とる何の程ゆる天の明く日影斜未の左側
 昨宵正しく乗つて平駄船へ何地ぬけん身へ大さる家の内の廊の下臥るる何
 奈と胸潰まて夢を現るる疑惑へ居て今も起ても更不安るる心をかうる
 推鎮くこ何処と問ふも四下小人の在るといふは窓の障子と推用きく外面遠く見
 目こそ渺々と天を續く海を外小物もる登時系袂ぬかうり身疲れて熱
 睡せし平駄船よりこの大船小艇へ乗せられりける欲むる神天皇の造を合ひ
 枯野船の長十餘丈あり又鎌倉の右大臣の唐山へ渡らんを沈和卿小造とて

大船^{おほぶね}のそよぶもすく五六十間^{ごろうしちゆう}のけり。と浦^{うら}の故老^{ころう}のから續^{つづ}いでいさぎよひ合^あはれど。いも
赤大船^{あかおほぶね}の中^{うち}の作る欄干^{らんかん}秋然^{あきぜん}と云ふ嶋^{しま}を成^なる人の住^する館舎^{くわんしや}のわんごをうごめされ
かものまを言^い度^{たび}る所以^{ゆゑ}の彼舟^{かづね}人が吾侪^{われら}と云ふ棄^すれしや誰^{たれ}も出^いで上^{かみ}り問^とはさず。
獨語^{ひとりご}の彼此^{たがひ}と慢行^{まご}をまゐる程^{ほど}の暇^{ひま}の女子^{むすめ}散動^{さんどう}きく瀬川^{せがわ}の秋布^{あきふ}との声^{こゑ}幽^{うし}不^ふ
彼^かえり系袂^{けいき}耳^{みみ}と敬^{うやまつ}く原來^{もと}の所^{ところ}天^{あま}の秋布^{あきふ}との館^{くわん}不^ふをたたまるるもあて恨^{うらみ}を
いとゞ已^やむ声^{こゑ}はる方^{かた}へ何処^{いづこ}ぞや間^ま毎^{まい}々々^{しづしづ}の言^いる小案^{こあん}内^{うち}に迷^{まよ}ひさせいも是^{こゝ}方^{かた}へ
来^きり。と心^{こゝろ}をどよめぬ岩^{いわ}越^こえ波^{なみ}のち瀬^せる淚^{なみだ}ぞいと進^{すす}まける。浩^あく五六箇^{ごろうしちゆう}の
婢妾^{めかけ}ホが向^{むか}の崎^{さき}を捕^{とら}へ来^きる瀬^せ入^{いり}を車^{くるま}もろも来^きと曳^ひの笑^{わら}ひ散動^{さんどう}の良^よ方を
扱^{つか}てるけり。系袂^{けいき}をくぐりてく。ほも彼^かのいづれを竊^{ひそ}かに後^{のち}小^こを所^{ところ}天^{あま}のえ
よの秋布^{あきふ}がらるるを向^{むか}て尋^{たず}ね思^{おも}ひの遠^{とほ}く膝^{ひざ}屏^{びん}の陰^{かげ}小^こ敷^しと。候^{まじ}程^{ほど}の婢^{めかけ}妾^{めかけ}ホの尾^び落^{おち}
り車^{くるま}の綱^{つな}をゆるみふふとく。そよそよと入^いり居^いる權^{かり}と休^{やす}み瀬^せへ木^き魚^{いさな}ぞ

らち場^{ばち}すく。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。つらふま。
たこそつと。唱^{うた}るを衆^{しゆう}皆^{みな}笑^{わら}ふ中^{ちゆう}の物^{もの}の哀^{あは}れを知るのわんごつと。て嗟^{あは}嘆^{たん}の
堪^たぬ喃^{なん}人^{ひと}々々^{たがひ}の。いづれも笑^{わら}ひぬ。その瀬^せ入^{いり}の腫^{はれ}張^はる歩^{あは}む物^{もの}の取^とり
木^き魚^{いさな}を歡^{よろこ}びけ。小^こ鳴^なうと。唱^{うた}る真^{まこと}言^ごの功^{こう}徳^{とく}と豫^よめぬか。髻^{むす}の命^{いのち}危^{あや}む不老^{ふろう}不^ふ死^し
をいづ刀^{やいば}の銚^{さし}物^{もの}のせしれんと。牽^ひ出^でて。免^まされ。幸^{さい}ひの。と。て。姥^{おばあ}口^{くち}の憐^{あは}れ
ぬ。く。歩^{あは}む。不^ふ自^じ由^{ゆう}の。の。る。れ。宿^{しゆく}直^{ちやく}葛^{かつら}菟^うの車^{くるま}小^こ乘^ま。と。の。殿^{どの}造^{ぞう}の。周^{しゆう}毎^{まい}々々^{しづしづ}と。各^{おの}
よめ。と。宣^{のたま}ひ。せ。い。ま。の。ゆ。き。で。や。か。の。の。樂^{がく}種^{しゆ}不^ふ考^{かう}ぬ。技^{わざ}の。板^{いた}薦^{せん}の。わ。ん。限^{かぎ}り。引^ひぬ。は。ぬ。
ゆ。き。で。や。か。の。の。衆^{しゆう}皆^{みな}笑^{わら}ひ。を。止^とめ。る。寔^{まこと}に。然^{しか}る。と。心^{こゝろ}の。諸^{しよ}手^てを。根^ねと。引^ひ。綱^{つな}の。座^ざ席^{せき}車^{くるま}の。裏^{うら}
ま。木^き魚^{いさな}の。音^ねを。ま。添^{そへ}と。る。奥^{おく}深^{ふか}く。引^ひ。と。色^{いろ}く。侶^り小^こ後^ごと。一^{ひと}箇^この。婢^{めかけ}の。走^はる。を。わ。と。呼^よ
留^{とど}め。る。系^{けい}袂^{けいき}の。膝^{ひざ}屏^{びん}の。陰^{かげ}下^{した}り。を。な。む。立^た出^でて。接^せ手^てを。ま。た。腰^{こし}を。折^をり。小^こ喃^{なん}女^め中^{ちゆう}の。同^{どう}侍^{しやく}
ら。瀬^せ川^{がわ}浦^{うら}三^{さん}郎^{らう}との。弱^{じやく}人^{にん}が。二^に箇^この。女^め子^こを。伴^{とも}へ。て。二^に箇^この。御^ご館^{くわん}の。女^めを。ま。る。ら。め。妾^{めかけ}の。由^{よし}縁^{ゆかり}の

尾田 巻之三十一

大(一)

のふゆり遭くとこと他事もろく想ゆか航く立かつて且堅小見の横ゆりて遠巡して
 頭をうち振り否浦二郎といふ人のあつて瀬川采女吉次といふ人のあつて妻を欲情く
 る秋秋布と呼ぶといふ美し女子と共小の御館のまをの初は君経高公の
 也あろふ情のときいて折檻せられなる遂小降参まてけは彼秋布をぬりて
 身邊近く百置ると人の噂ゆせるとの俺們もあつて見ぬ人をいふれ遭志死
 御家老さる願ひあつてあんとあつてあつてこの隨意まあひねといひ捨て又白え
 とまると糸秋の遠く袂の携り引笛と吉次と名告するハ浦二郎ぬ侍るが
 よや後間を隔る後堂お置るともいふと妻を侍るのいふお障りのあつて
 願ふ糸秋の汲引と遭いあつて情をなやと喃と泣声立ち口説を聴か振放く
 天無礼過る女子の浦二郎でも吉次でも殺人妻のあつて死ぞあつて彼人と情由
 わそ追蒐来ぬ淫婦のそあつて不義淫奔ハ武家の大禁罪得まぐ汲引を

九ふゆり
 時分身
 唯作者
 唯地あ
 唯蓋餘情
 唯そそ
 唯下物
 唯不辛
 唯ま

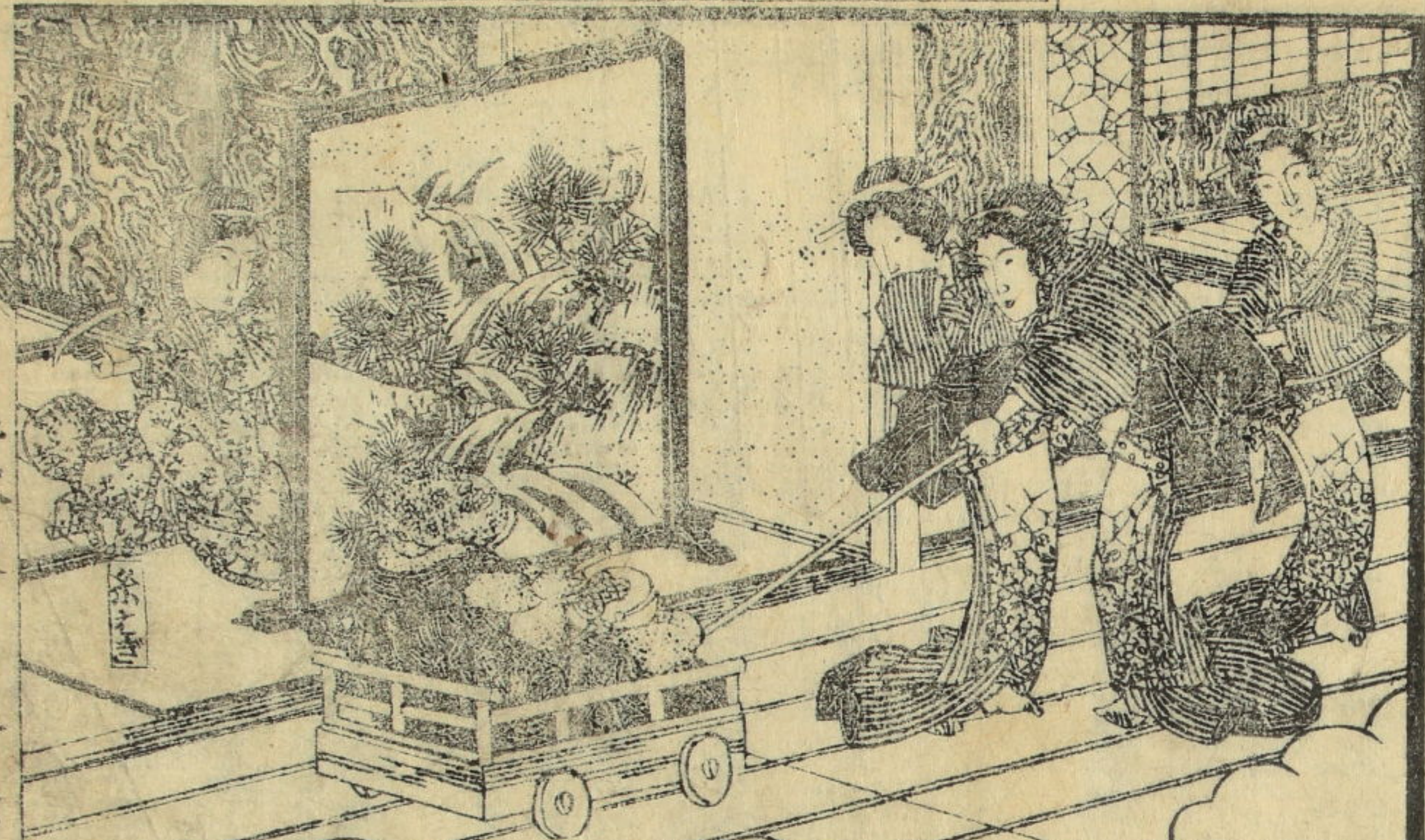
甘んば瀬人車と見後と朋輩達お叱られん不覚のたつてさうとつて
 引笛と不効びきと揮拂ふ巻の牙糸秋の御言を撃きま踏地々々と使燈く
 控と轉輾ぐるぐる腰お神の鎌の刀尖深中脱をまろりまんと操研つて叫苦とまろ
 魂消る吉お機書きかかす婢妾うち種胸を推拊く豫て準備とまろり袂の中より
 細小る一箇の壺を取出して糸秋を瘡口を流る鮮血を受入々々造化精妙と戴きそ
 走りぬ奥を刺さける目く糸秋のあつて起直とまろり死の深痰お怒れる
 声を戦く噫腹立ち朽きや憎とまろり秋布のあつて復さんと帯お押す鎌お
 身お磨きまの前の世お造り罪の致す秋然とまろり恨み浦二郎の名を誇りて娘と
 夫婦あつてん為のあつて闇るぬ身を暗く天の免さ逆賊の従ひあつて何事を忠孝
 信義の道絶し人あつて甲斐とあつて然今も九の世と見易るとも盡べりや
 どのあつても現身の息の内お本意遠く死魂魄かの身お貧縁と死天の山路お伴ん

その折紙の如きか。南無阿弥陀佛と唱へて身入りの利録を引抜き、呪を掛んと
 する程ふや上等未通女體の母とて声高き呼禁を杉戸のきく糸杖の身邊へ
 進み寄り、その是則別人の壻口歌三郎得時之登時歌三郎へはやくとささ
 へん。又のあびてあおひて。嘆の壻口歌三郎得時と呼ぶものぞ、不測の術ありて
 嘆の壻口再声と激しくおれ糸杖苦痛と忍び、その身を仔細に聴け、瀬川
 胞兄弟の太きるるる舊縁ある壻口歌三郎得時と呼ぶものぞ、不測の術ありて
 人の吉由禍福のさへ過去未来の事まで、これを知らずとゆるる。借はぐ前身を
 考ふむ。欽明天皇の御時、紀男麻呂と將ら、新羅を討つぬ。その軍
 利のむして虜にせられ、日本の義烈士調吉上伊企難ら、その伊企難を罵る
 胡子和とのひ、新羅國の大將を殺す。是より後、六百三十九年を歴て伊企難の肥
 前の松浦より瀬川健三道孝が三男浦二郎選如と生れ、又伊企難を殺し、胡子
 和の則は、身入るとして浦二郎と妹仗の縁と結ぶも、竟め夫婦とすと得る。其

伊企難の
 欽明天皇御
 位三十九年
 伊企難の
 肥前守
 山天皇の文
 亦元年
 生れこれ
 此皇孫六百
 三十九年

その兄瀬川吉次を浦二郎とて、又違ひてその義の深く、二親の論を信はば、吉次
 夫婦と追莫来て、その身を殺す。是より前、世の業報は、必ずしも怒むが、これバ
 又浦二郎は、曩のその兄吉次が名を肩し、形を以て鎌倉赴く海寺、凡同船と血氣を
 殺す。その厄を釋せ、高王觀世音井の呪文を傳授せ、つら相模の動の磯ゆ
 瀬川加二郎長城野兵太水、水撃とて、かゝる死を免れ、波の引、且教旨を漂流せ、
 長門國大津郡向の崎の著き、時浦人の父抱りて、積後生るとて、得る。あはれども
 数日の潮毒、膏言ふ、身は腫張り、行はれ、呪文の外、ものゝろ、以て、彼処の
 三輪を送り、厄中、あはれ、今茲、彼胞兄弟の從、肥將、釋人、とす。されど、
 知るもの、知れ、し、御供は、あはれ、座席、車、兼せ、れ、木魚と鳴り、呪文を
 唱へ、瀨川、即浦二郎、渠の神呪の利益、あはれ、死す、と、あはれ、彼朝、毒を、
 草根、木皮、の、交、び、只、己巳の年月、日、時、を、下、女子の、土、德、牌、の、臍、の、鮮、血、を、
 飲、み、

引く 車を 諸婢 (前) 弄る 乞者



糸子

徳川



徳川

若二郎

徳川

徳川

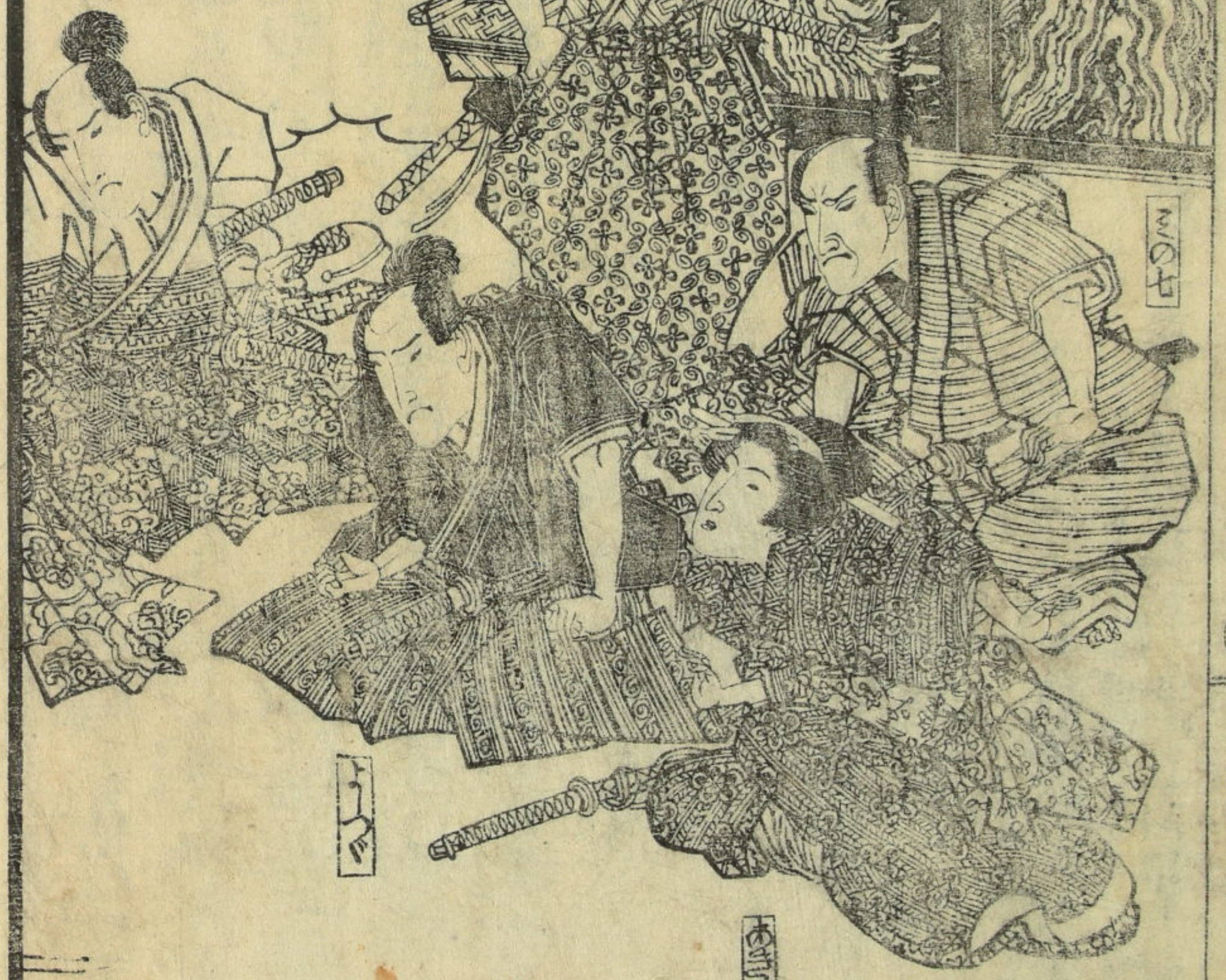
徳川

徳川

前身を知る (後) 解 腫血潮毒と



若二郎



徳川

徳川

徳川

徳川

徳川

一時の尋ぐ飲と死の毒毒立地の除祛と其の腫氣水の決まる如く卒然と消散せしむ
毒と解するの土をふれ其の殺る一且汝が八字生来の戊己をみるるを支干の未と午の
あく亦是五黄土徳の属せる故か命運の末場と剣難脱れぬやうせられ豫より知るをりて
又幻術を施すこの船中へ引寄りのまは利鎌を働くと索を断り術を獨汝が執念のよ
まの所にあつて死憶ふ汝が前身の新羅の胡子和なるゆゑこのまのく糸萩と名づけし
も名詮自性萩を芳宜と訓する皇國人の誤りか和名と芳宜と呼做そのの漢名即
胡枝花なり胡枝花の本草胡枝花と胡子和との音近し亦奇夏との音の然れば過世の
紫菀ゆく調の伊企離が後身の浦二郎と縁を結び恩愛仇とあるも糸萩の間胸を
焦す遂に非命の死とすその時の賊の鮮血と良人の糸萩の難病の良薬とある大
功あれ成道成佛疑ひなきる如く説諭を言語の中糸萩の迷ひの雲霧霽霽と
して天津日光をみて悔くも恥し死身の紫菀と今ぞ知る感涙を方あるの志を願く

歌三郎を伏拜す又うかむ位と向上と女子の思ふ如く胸狭く
恨も死人を恨むも現罪深きと然と神の佛も方であぬ身身の教訓有る
まにまに各僧智識の引導の優を心地と稟侍りて過世に仇ありともその世小
まに妹と仗の縁を結ぶ浦二郎一切今般の對面をこのひかけ又泣流る歌三郎の
目と屢動きて通徹妙き覺期之誘ふ願ひのたまふく選如對面を再入瀬川同胞其
処のや在ると進まぬと薄立直木板戸の蔭より忘れしと出する浦二郎の痴人の相貌
引く衣裳美々丸大小の刀を腰小跨へて手小一領の戦袍と一箇の木魚を推る
蹴み續く吉次秋布菘七も出きて来りも負の身邊の四壁にて歎き對する中浦
二郎の愀然と糸萩の對ひに絶えたる五妹子が隣に對面するののひ替へ
血の功験併嬉口ぬのまの情依るのの裏みか刃を加三郎亦の殺されし屍を
負の時海水の漂波と西刀を失ふの辛ひめと執權家より兄弟賜り

歌三郎を伏拜す又うかむ位と向上と女子の思ふ如く胸狭く。恨も死人を恨むも現罪深きと然と神の佛も方であぬ身身の教訓有る。まにまに各僧智識の引導の優を心地と稟侍りて過世に仇ありともその世小。まに妹と仗の縁を結ぶ浦二郎一切今般の對面をこのひかけ又泣流る歌三郎の。目と屢動きて通徹妙き覺期之誘ふ願ひのたまふく選如對面を再入瀬川同胞其。処のや在ると進まぬと薄立直木板戸の蔭より忘れしと出する浦二郎の痴人の相貌。引く衣裳美々丸大小の刀を腰小跨へて手小一領の戦袍と一箇の木魚を推る。蹴み續く吉次秋布菘七も出きて来りも負の身邊の四壁にて歎き對する中浦。二郎の愀然と糸萩の對ひに絶えたる五妹子が隣に對面するののひ替へ。血の功験併嬉口ぬのまの情依るのの裏みか刃を加三郎亦の殺されし屍を。負の時海水の漂波と西刀を失ふの辛ひめと執權家より兄弟賜り。

この戦死の身をたまはさるる面影の変わりぬじと不親子兄弟うらふとる世の認めりの
 あらぶも再會の日の微ぬせんとおろく秘置するにがたれ姫御を認らひの目向の
 埒跡來と訪きよもわが身の人めけの初く復得り。これとわ身の過世の念敵輪回ハ
 環の端るた如く俱ぬ肥の列ぬ生と來と夫婦の情義を果さるる難病の本復ハ
 全くお身の續る業因消滅するに由來世永々夫婦とるん御めりの牙の厄難
 解除の爲ぬ唱へ真言の木魚も今ハ妻の爲長く菩提を吊ん佛果を得と勧めさる
 頼ぬ良人の言の兼餘波の花の糸萩の苦痛と忍びうち向上と如此宣へる多くと死して
 榮ゆる身の手ひゆ未るる百年の壽命終らるる日と草の原ぬ使侍りぬ宋女
 さる御夫婦の面目も今ゆるぬのりもゆるぬと欲しぬ父と母御前孝
 行り仕へるを歎きを遺さるる不孝の罪許さるること口説き得堪ぬ手枕の声を
 惜むると泣く萩の陰と若三郎と共侶ぬ走出く女見の右より左よりやと糸萩の

母ぞのい美々公のいおむとるぞ一言の今生の告別とあぬとる過世とまむの
 のと檜の實の口ひり子と養育十のむの六とをの夢と覚くこの遺る一柵樹の
 何とるは浮世と悲たると携着と歎くと林若三郎も苦丸胸と推指と手枕
 の歎きをせと過世とる現世と子と先とる薄命とる時情欲の罪障ぬ
 とあつんとる嫉妬の敵滅と想思病と空くる心のとる後世ると今ハ迷ひの
 雲霄と臨終いと愛ぬ念勤り免かとの声定とあえと親とんかへる糸萩の糸
 らと細る声と登々公母御前けらるる念とあぬとる追薦供養元ハ優とあるべ
 らる二親を浦三郎や憐れ一期と送りぬの哀妻が爲の追薦供養元ハ優とあるべ
 や頼と侍るのい言毎息絶とる色変る知死期時吉次夫婦慕むる
 慰むる唱名の声と合とる諸回向散際清き糸萩の合掌と息絶けり候のい手
 枕が俱ぬ死と泣沈むと歌二郎諫將大と益ぬ悲歎の時を程さ豫との計更空とる

るん根塚夫婦の亡骸を快船もち乗し伊万里へ帰りて葬りて秋布の刀自の今
さう泣きさる宛ぬあつて親の仇る加二郎と討捕る準備肝要らんその後見入親長七
瀬川氏同胞の期の手配るるる秋といふと齊一勇なる夫婦兄弟主従のその中
若二郎ハ惘然と立ちあがりて此の処に留まりて一臂の力を勤せんと只管詰り己
けを登時浦二郎ハ腰の帯を西刀と戦袍を共し兄吉次ハ返すといふ身
物ありと某借用と鎌倉赴く折西刀を海底に遺せり不老不死の中刀ハ加二郎ハ細
罹り大刀ハ又姥口ハ何の程かろき揚ぐけの某ハ賜ひぬ死先をこれを受るる
いふ吉次秋ひくこの西刀ハ親の像見戦袍ハ君の賜きと失せんと返さる是も亦
姥口主の庇ゆくのけ秋三槍以来ハ腰の帯を和殿の西刀とさるる處より受つ
兄弟夫婦仇討の準備の暇さるけり然程ハ鼠川加二郎ハ吉次降参るるより走馬場の
絶の中より不老不死の名刀と銚と御覽ハ備へよとの下知と歌二郎の傳ハハハ

大なる時刻ゆめありハハ組紐の袴を被り袴と袴高ハ結ミ苛物造りの西
刀を腰の帯とひり走馬場ハ立出たり且くハ経高ハ彼名刀の鈍利をんん為ハ槍垣轉
馬浮美伊加太郎ハ従へハ慢幕打テ観駿舎の諸の雨ハ著ふけハ姥口歌二郎得
時ハ百五六十箇の雑兵ハ馬場の四方より圍ハその身ハ床ハ尻ハ掛テ観駿舎の埒の
中央より既ぬハ加二郎ハ歌二郎ハ身邊ハ来テ彼名刀と乞求ハ歌二郎微笑テ件ハ
不老不死ハ和殿ハ吉次を斬ると死ハ某これを遮与マシ權ハ寺ねと推禁ハ東の
うち對ハ秋布主従瀬川兄弟と出下と呼ハ風ハ漏ハ立圍ハ雑兵ハ
背の方ハ忽地阿と応ハ秋布ハ白き衣ハ玉釋ハ薙刀ハ杖ハ閑寂七を従ハ
いハ進マシハ瀬川衆ハ吉次ハ弟瀬川浦二郎選加と列立ハ錦の戦袍を被下
肌膚ハ細錄の帷子ハ著るハ甲臙盾ハ身ハ固リ各々西刀ハ腰ハ帯ハ絶の中
入ハける登時秋布主従ハ加二郎ハ左右より進マシ近ハ仇と疾視ハ不俱戴天ハ父ハ

一ノ鬼承後

鼠川加二郎覚めりん汝が謀書の故をのり寛柱の命を預せ博三又弥四郎素延が文見
 秋布従僕関甚七と名告むともよくあつらん覚期とせむと詰まれば加二郎大く駭きて
 是の抑いふぞや経高公に従るるが銚物おせらるるべ死吉次夫婦主従がその光景の何事
 ぞと問せものぞ歌二郎ハ何々と冷笑ひく愚るる多加二郎武行瀬川吉次ホハ既せよ
 五君ハ降参す仇討の事と願へりれハ知れども知らん汝ハ還る野心のり経高公と
 撃捕と鎌倉へ立歸りその身の罪と贖えと豫く伎倆一浅智の宵中悪むともぞや
 覚へりそく勝負を決せりといふまじく加二郎脱る路なく怒まる声とあり立き原来たか
 計較の裏とぞくもかたふけりその誤るる武行ハ本事とぞハ知れまへ観念せよと
 唝呻ハ旬詔く刀と抜き撃つとまると秋布ハ薙刀のり拂退け進み入る面もあつて戦ハ
 甚七も又秋布と資けり挑む刃の雷火丁々破と撃あふる後の方ハ浦二郎が身方を
 勇る声高きハ動の礫の遺恨を譲りて見れば後見とまるとのハ嫂御前心強める下邊と

寛めく薙刀左よ右よと烈ハ助言ハ加二郎のりく焦燥く背お立てる浦二郎と
 斬んとんかへ敵の透間と秋布得らると薙刀を振りて丁と破る刃の光ハ加二郎ハ
 碎谷三寸深瘻を肩と怯むを透さず甚七も一大刀當る主の仇力と易く斬伏せり
 當下秋布ハ腰ハ挿る命婦左の短刀と引抜き十々滅と刺く立あれば歌二郎ハ扇を
 披きくあか立の稱賛と然と瀬川胞兄弟の歎ひいふとそれるる雑兵ハ亦の
 声を合して答ふけり既めく経高ハ瀬川同胞秋布ホと觀駿舎へ百登と主従一味合
 体の不皿を取らせんとて欣然とく俟程ハ歌二郎ハ相伴る吉次ハ名浦二郎と共侶ハ登り
 来つ主の身處ハゆる伊加太轉馬を蹴倒せり兩人齊ハ敬馬怒りて身を起し
 腰刀を抜んとまると抜も果て果つる胞兄弟ハ銳利き刃ハ伊加太轉馬ハ首を
 撃落され左右ハ撲地と仆まるとあひぶる死為体ハ経高頻ハ敬馬駭きて音ハ
 者共ハ二の癖者をとく敷き笛と叫びて逃ハとまれば外面より秋布甚七妻ハ聚きて先路を

てやう寒きる後の方々古次選如俱勇る声高き逆賊経高進ると何処へ脱
走られ豫より時宗朝臣の御説小従ひ奉り久し索し甲斐のりて姥口氏の内応を
ゆるりより目今誅するぞ刃を受ると名告かけし胞兄弟ひとく撃き大刀風経高の柱を
あつて倒し倒しを起直り声と詩立り忠臣と必ひる歌三郎さ心変りて刃の救
深きゆ撞と倒しを起直り声と詩立り忠臣と必ひる歌三郎さ心変りて刃の救
る非道の奉動噫朽をやと敦固ハ歌三郎進み出阿々とうち笑ひて経高のくもまじ
得らばや目今福ゆく自滅を救ふと稔汝を兼ひし謀反あふまき所以あわづこれ
と累世因みの瀬川氏胞兄弟の厄釋故御へ歸る時汝を撃して大功を立せんと必ひ
然るにこの乾押丸の連環船も樓閣亭舎も美女雑兵も妙術の致す所皆是海市
蜃氣樓の類ると知らざるや雖然之檢来よ死夢をのぞき言ふハ謬く汝が為軍師
とあり清繩が受る俸禄の恩お答るる聊の心操え疑ふ彼をいよといひハ秘文を
唱ま今や四下と捕圍する百五十箇の雑兵も忽然とく小蛇も変りも齊一海ぬ

飛入り往方もあまきりハ経高駭怪と忙然る後の方々も立達る吉次が声
高く内を刃の牙め経高の頭を敷れけしけり若二郎の手枕と共侶物陰
より出く入る人々うち對ひて姥口氏の懇切糸杖が七殿を成して帰るといふか
仇討の聲の響をえんとく彼処ゆひ独加二郎のまきで経高さ誅伏せし是ハ國家の
洪福之れハ就も糸杖がといひハ眼を辱動けハ歌三郎慰むその熱嘆かするまき本
是因縁のりてまれば必しも悔ふまは儂ゆの説否し如く浦二郎が前身調吉士伊企難之
伊企難が妻大葉子の節を守り歌を詠とく新羅の軍兵殺されたり後身ハ鎌倉
の博三郎正延が女児千鳥は之の少女浦二郎の妻ある元のものれそを糸杖と
るの敵親も久後安るべし吉次の前身の大伴扱も彦も又秋布の前身の松浦佐用
媛のりて浦二郎千鳥も亦かる因果のりて疑ふるまきといふハ家臣感佩し
然るゆへに姥口氏の鬼神を欺く智術あり且來女浦二郎ハ昔縁のりて言ひのりて故の



一丁鬼録後

九七

一丁鬼録後

九七

そと齊一同を領き今誰なる懸むたれ長門の向の洞の敷千載住る龍神吉次
選如本が外戚の岬氏の子なり龍村の後裔を捨かたはひのあざのく二輪米
影の立形は深きその厄難を防ぐ鯨のこゝ及ぶ之同胞功成り名を尊ぶ
相別る東の磯の二艘の船のその二艘の瀬川胞兄弟秋布蓑七ホも来とて鎌倉へ
赴く又二艘も根塚夫婦系萩古骸をもち来て伊方里歸りて埋葬せし今この是
まをのゆきくといひ多くあつた外面の降集も雲も来りてその空の中を登ると平
形體の忽地全色の神龍と頭と長門の方へ飛去る程の乾坤丸の大船殿舎の煙の如く
滅失せし肥前州のあつた無人嶋をぞりける鯨の不測吉次本兄弟夫婦主従の駭
嘆をよそののう俱は其方を伏拜する久後を祈りけりか吉次秋布浦二郎蓑七
ホの経高主従の三箇の首級と鼠川加二郎の首級を携へ若二郎手枕と共侶の龍神の誨
に従く東の磯のあつたる果して船二艘あつた二艘の系萩の古骸を乗て来て

衆皆のく龍神の眞助を仰ぎ尊き送る再會を効し袂を分ち各々船に乗
けるその西船ののう東西別れ走り走ると飛鳥のりも速るれば若二郎夫婦の乗る
船の瞬間の旗津の著きぬ又吉次ホが乗る船の数百里の海上を只一晝夜小走る程小次の
日未の比及小鎌倉の著る吉次ホ浦二郎秋布と相伴て執權の御邸へ赴き経高加二郎
ホと撃捕する事云々と許り登時北條時宗朝臣の吉次が恙なく帰参しを訝り
石匠つてその鯨の趣を向へ吉次ホの身丈婦の事の顛末并小弟浦二郎の俊平が
枉死蓑七の又若二郎夫婦系萩の事と向の増き龍神の擁護ふりて本意を
遂る一五二と述記く秋布の多り仇討免許の御教書を返上ければ時宗感心大
かこらむ浦二郎秋布蓑七ホも共侶の見参りけり極哀美の受をなす航と首級実
檢めりて経高主従加二郎ホと梟首せしめ小后吉次ホ舊領の外糸地五千貫を
ぬりて頼綱の次職ある浦二郎の社園に宛行ひぬく末の龍華か下遣し

且隔年小鎌倉へ参勤せしと命せしるこれ又博多倍太郎の龍神示現の趣を傳聞す
疑ふところその女児千鳥を浦二郎の妻とす且根塚若二郎手枕を親の如く又舅姑の
とて親を養ふと教訓を俱ふ肥前遣りけり程の秋布の南殿亦見参りて龍神示現
示されぬものむら鳥と系の攷證と云々と云えぬが南殿秋布のひく且仇討の恩賞
ゆり秋布の秋布の石切山より叢菊の中より生れりといふ菊子と呼ぶものるんを
當時諱りゆり菊の異名を取らんと然るに改め菊子とすまかりけり
とて件の名を改めゆり有此而秋布の菊子その次の年より六七年の程の男児四人産ふ
けれ吉次その二男とて外祖博多弥四郎が家と嗣し三男とて養七の養とて関氏を言ひ四
男は俊平が後とて村山氏を言ひけり又浦二郎もその妻千鳥の子も言く産して両家東
西の繫糸昌けりされ又根塚若二郎手枕浦二郎夫婦の資ありて浮世と安住住候一
の八十餘歳の壽命とてのちぬぼる先吉次の叔父清繩が傳授せし秘書の二巻と熟讀

路考が屋
号を濱村
屋と唱るも
吉次が母
濱村氏と
前集は
えんは縁
あり

○ガレんのんやう○せらるる
志で軍陣陰陽説相の術をりせり執権の子息達の師範と仰れくその家も栄え
○傳小曰近世の歌儂伎役者瀬川菊之丞の吉次菊子情義を景慕して瀬川
と稱し菊之丞と名法たりその世の人の知る所を按する元祖瀬川菊之丞の字保
十五年の冬初東行し中村勘三郎座へ出り
四郎太郎座あり評判記の品
この菊之丞が俳名を路孝といひ吉次が父の名を道孝と
いふゆき暗合まといへり又二代目瀬川菊之丞の
これ亦采女吉次が名を取らるゆき強々説とすは菊次郎が俳名を仙女といひ
浦二郎が實名の選如と字音相近しれ又蛇足の辨ると緯の因の識との
曲亭主人自評して曰第廿二面吉次呵責の段の音曲合奏の趣は頗難劇の
脚色不似たりと云れり乾坤丸の爲体はとて神龍化幻の術中あり
人を魅する異なりむかむか爲とて事とてわらるる事とてわらるる事とてわらるる事

大納言の物語のあらましを
 大約小説の實場あり虚場あり虚場あり云云乾坤丸船舶中の緯の趣又村
 山俊平が夢寐の一段即ち是れ實と虚とを情態を写すを以て虚の猶假の如し虚
 實の二場を辨するの如く小説を観るとの如し
 曲亭主人又曰予が著する冊子物語の既小二十年不及そのの刻
 板若干亡失し全かざるの故久しく掲出せざるあり古板をあるを求
 めり足らざるを補刻し予が校訂を請せしと恣に画を易文を誤脱しと再
 刷するのありと竹の呀云拈頭巾縮緬紙衣化競又三鐘この他も尚あり凡
 あれらの書ハ予が各號ありといふとも予が校訂を歴せしと他人の手ハ成まるの
 かまが予が全作とせむらふ漫戲の舊著を物がましくいんる大人氣を死ふ
 似しと名を賣るの騰踏さふ言のふ及るの之者官あれを察しぬり。

松浦佐用媛石魂録後集卷之七 終 小本己



家傳神女湯 諸君の御覧 色代百韻
 近き美作高直の御覧 色代百韻
 精製衣音應九 大包代紙 中包代紙 五ト
 熊胆黒丸 子 多ののいけを以て九ト 百代下
 婦人 色虫 茶 一包 六十四 半色 子 箱
 制法 神田明神 下 同 朋 町 東 横 丁 滝 沢 氏
 弘 明 元 飯 田 町 中 下 南 洲 大 倉 氏
 同 取 次 町 横 山 丁 二 丁 自 賣 茶 店 大 倉 半 藏

曲亭公翹新著松浦佐用媛石魂録後集画工筆册印刷目次

出像 溪齋英泉画
 谷 金 川

浄書 卷一四五六七ノ前段 谷 金 川
 卷二二七末并序目 筑波仙 橘

印刷 原 喜 智

近世説美少年録 曲亭主人著

初集五卷末己丑の春正月
 相違なき製本上賣出レリ
 此節より後集と同時製
 本仕外所求御覧下
 松浦佐用媛石魂録前集 右同作三冊

文政十一年戊子春正月吉日發行

大坂本町通心字橋東 河内屋真七
 江戸 傳馬町二町目 丁子屋平兵衛
 同 横山町二町目 大坂屋半藏梓

